

さて、ヨセフと言う議員がいたが、善良な正しい人で、同僚たちの決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。この人がピラトのところに行き、イエスの遺体の引き取りを願い出て、イエスの遺体を降ろして亜麻布で包み、まだ誰も葬られたことのない、岩を掘った墓の中にイエスを納めた。その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。イエスと一緒にガリラヤから来た女たちは、ヨセフの後に付いて行き、墓と、イエスの遺体が納められる様子とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した。(ルカ23:50~56a)

主イエスは、午前9時頃に十字架につけられ、苦しみ抜いて、6時間後の午後3時頃に息を引き取られた。短い時間で亡くなられた。十字架の下で見ていた群衆は、主イエスの言葉と態度から感動を受け、胸を打ちながら帰って行った。刑の執行を仕切っていたローマの百人隊長は、「本当に、この人は正しい人だった」と言い、主イエスの十字架刑に神を見て、神を崇めた。主イエスの十字架の死は、神の御心が実現する出来事であったことを理解したのは、復活の主イエスに出会い、そして、聖霊降臨を受けた時であった。

十字架刑で死んだ者は、引き取る人がない場合が多く、十字架から降ろし、その場に放置された。すると、野犬が来て肉を食い、野鳥が来てついでに、白骨になって、刑場に転がされた。主イエスの場合、当然、弟子たちが遺体を引き取り、埋葬するのが当然と思われるが、彼らは、主イエスの仲間であると知られると、同じ十字架刑を受けるのではないかと恐れ、とある部屋に隠れ、遺体の引き取りなどは考えてもいなかった。

この時、アリマタヤ出身のヨセフという人が登場する。彼は善良な正しい人で、神の国を待ち望む信仰の篤い人であった。マタイ福音書では「この人もイエスの弟子であった(マタイ27:57b)」と書かれている。このことの真偽は分からないが、主イエスに深い敬意を持っていたことは確かである。彼は最高法院の議員で身分が高く、金持ちであった。昨夜行われた最高法院での主イエスを神への冒瀆罪で死刑に当たると定めた裁判は、誰も抗することができないほど、怒涛のように推し進められた。ヨセフは、その進め方、決議に反対であったが、声を上げることができなかつた。主イエスへの敬意は深く、また、反対の声を上げることができなかつた悔しさがあり、ピラトの所に走り、遺体の引き取りを願い出た。主イエスが「されこうべ」の刑場に転がされ、白骨になることに耐えられなかつた。しかし、この申し出は主イエスの仲間と見なされ、危険が伴うが、彼は勇気をもって自分の墓に主イエスを埋葬しようとした。十字架から主イエスの遺体を引き降ろし、亜麻布に包み、まだ誰も葬られたことのない、岩を掘った墓に納めた。当時、貧しい庶民は、死ねば、遺体を土に埋め、その上に石を置く形が大半であった。主イエスは偽善なファリサイ派の人々に、「あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている(マタイ23:27b)」と語っている。ヨセフの行為、主イエスが岩を掘った墓に安置されたことが、復活に繋がった。ヨハネ福音書は、主イエスに敬意を持っていたニコデモもこの葬りに加わったと記している。

ガリラヤから従って来た女たちは、ヨセフの後に付いて行き、納められた墓を見届けた。労働が禁止された安息日が近づいていたので、遺体に十分な香料と香油を塗っていないことも見ていた。彼女たちは安息日明けに、香料と香油を十分に塗り直そうと準備をした。